



放射能汚染と美しい自然

「ベラルーシとの交流を振り返って」

秋田大学名誉教授

三浦 亮 (みうら あきら)

市街地の中心から車で1時間の山紫水明の地。空は青く澄みわたる、川には清らかな水が流れ、河岸から続く周辺の緑も美しい。しかし、この地は、放射能によって汚染され、今後何十年にわたって人が住めない。わずかに数日ではあるが、1993年8月にベラルーシ共和国を訪れた時、案内された場所である。

ベラルーシの自然は美しく、旧ソ連邦の一員として誇りも文化度も高く、人心は純朴である。しかし、社会・経済状況は厳しく、歴史の傷跡は今も深く残っている。欧米、オーストラリア、中国、韓国などは異なる旅情の日々であった。

に当たっていたユリ・シエーフエ(26歳)という気鋭の青年医師が来日し、翌年5月まで我々と日々をともにした。

ユリは長身白首の好青年であり、熱心な研修態度は我々の共感を呼んだ。彼は日本語がまったく話せなかったが、あまり上手と言えない彼の英語は我々の英語力とよい勝負で、かえってお互いに気後れせず、よく情報を交換しえた。

彼は医師としてベラルーシでもしかるべき社会的地位を持ち、尊敬を受けていたようであるが、体力勝負が求められる血液疾患に対し、過酷な働きを強いられていたようである。

土・日・祝日は関係なし。深夜でも入れ替わり立ち替わり、20代、30代の若い医師が病院に詰める我々の医局(それでもなお手薄をかこっていた)が羨ましかったらしく、*"Your members are very strong"*(言わんとするところにはよくなる)と評価してくれた。

教室の行事、コンパ、旅行などにこまめに誘い出す傍ら、私も数回我が家へユリを招待した。医局

1986年4月26日、ウクライナ共和国で起きたチェルノブイリ原子力発電所4号炉の事故は広く知られている。一瞬で原子炉は爆発、それによる火災が何とか収まったのは10日後であった。爆発による直接の死傷者に加え、風向きと降雨で、放射能の高度汚染地帯は広く拡がり、中・長期にわたる甲狀腺がん、血液疾患の増加が報告され、特にロシア、ウクライナ、ベラルーシの東スラブ3国で著しかった。遠く離れた日本でも野菜や水などから放射能が検出され、問題になった記憶がある。

チェルノブイリ原発事故も一つの誘因となって共産主義体制の矛盾が一気に噴出し、3年後の1989年11月には「ベルリンの壁」崩壊という象徴的事件と冷戦の終結、さらに翌年の10月には東西ドイツの再統一、その後のソビエト連邦解体と歴史の歯車は急速に回転した。

この原発事故の後、秋田県内の市民団体であるNPOの佐々木氏が直接原発の被害を受けた地域を訪れ、その被害がベラルーシにも及んでいることを知り、何らかの支援ができないか、と考えた。支援をするのがなぜ事故地のウクライナではないのかは筆者の知るところではないが、おそらくベラルーシの受け入れがスムーズに行われる状況であったのだろう。東スラブ3国と秋田の交流がほとんど

内の雰囲気は暖かかったが、それでも若い彼にとつて初めての異国での生活は厳しかったようで、3カ月後には強烈なホームシックに襲われたようである。その時ちょうどよくというか、ロシア大使館員が急病で帰国することになり、医師としてユリが付き添い、ベラルーシにもわずか1〜2日滞在できたので、彼のホームシックはたちまち回復した。

クリスマス・イブは我々の医局では各自自宅で過ごすことが恒例であったが、その夜は妻がクリスマス・カード、ケーキ、肉類などを持って彼のアパートを訪れてプレゼントした。彼にとつて非常に嬉しかったらしく、帰国後の手紙、数年後の彼の再来訪時にもイブのお礼を繰り返して述べていた。

研修を終えてユリが帰国してから3カ月後、1993年8月に我が医学部医師団をはじめ9名のメンバーがベラルーシを訪問し、各種の医療施設を視察した。メンバーは私の他に前学長の渡部美穂夫妻、小児科の高田五郎教授、麻酔科の盛直久助教授、医療短期大

学部の女子看護学生2名、そして今回の懸橋となったNPOの佐々木氏ら2名という一行である。トランジットを除けば、私が旧共産主義国の内部に入り込んだのはこれが初めてであり、社会、人情が欧米とかなり違うことを痛感した1週間であった。

ベラルーシにて

成田空港からロシアの首都モスクワまで空路9時間、飛行機を乗り継いでベラルーシの首都ミンスクまで2時間。時差もあるが、その日のうちに到着する。翌日からベラルーシ共和国の保健大臣、ミンスク市長、ミンスク医科大学の学長など多くの要人と会見した。日本との繋がりがほとんどなかったこともあろうが、大した歓迎ぶりであった。またミンスク医科大学付属病院やチェルノブイリ原発事故の被爆者を主に収容している病院等をミンスク市、ゴメル市で訪問し、ゴメル市民病院では私が英語で日本・秋田における骨髄移植の現況・展望について講演した。ユリが在日中に大進歩を遂げた英

なかつたこと、民間団体として何が可能か必ずしも明確でなかった中で、精力的で実行力のある有志が、金より物、物より人という考え方で支援方法を模索した。

今回の援助活動を発想したNPOの佐々木氏は最初、広島・長崎の原爆投下後に長期にわたって被災地住民から白血病が多発している事実を知り、ベラルーシから秋田に医師を呼んで医療研修を行うことを企画した。この時の彼の行動は誠に瞳目に値するもので、県や資金提供団体に働きかける一方、研修受け入れ病院として我が秋田大学へ、特に当時骨髄移植については東北一の実績を持ち、私が主催していた血液内科へも打診があった。

民間の有志の発想であり、旧共産主義国が対象ということに、国立大学として躊躇する向きもあつたようだが、教授に就任して十数年、最も活動的で自信を持っていた時期の私は、気軽に研修を引き受けた。

1992年6月、ベラルーシのゴメル市民病院で血液疾患の診療語により、講演をよく理解してベラルーシ語に通訳してくれた。さらに秋田へ留学を希望する医師10名ほどと面接するなど、充実した滞在であった。

若人の逞しさに感銘を受けたのは、看護学生の2名からである。訪問団の一員とはいっても、実践力としてそれほど期待していたわけではなかったが、病院訪問に際しては「ストラスト・ヴェチエ」

「ダツシユダニヤ」とにわか仕込みのロシア語は堂々たるものであり、特に甲狀腺疾患で入院している子どもたちの慰問では、主役といつてもよい活動振りであった。ミンスクに滞在中、朝7時頃さわやかな空気に誘われて、私は1人ホテルから出て10分ほどの距離にある小高い丘の英雄都市記念碑に登ってみた。出勤がそろそろ始まって、自動車、自転車は走っているが、日本でいうラッシュアワーというにはほど遠い状況であった。さらに街の雰囲気そのものが平和で、しばしば異国の都市で体験する雑然さ、危険はまったく感じない。一人歩きも楽しめる、よ

